

ヨハンナ・シュピーリ原作 “ハイジ”の視覚化の歴史と現代的意義

浜松市美術館完全オリジナル企画
「ハイジ展－あの子の足音がきこえる－」から

川 島 隆¹、ちば かおり²、島 口 直 弥³

1 はじめに（島口）

令和4年7月～9月、浜松市美術館（静岡県）にて、「浜松市美術館完全オリジナル企画『ハイジ展－あの子の足音がきこえる－』」（以下「ハイジ展」）が開催された。

“ハイジ”の物語の原作は、スイス人作家ヨハンナ・シュピーリが1880年にドイツで出版した『ハイジの修業時代と遍歴時代』と、翌年に出版した続編『ハイジは習ったことを役立てる』の2冊の小説であるが、この小説は約70の言語に翻訳され、派生作品や映像化作品を含めると無数の“ハイジ”のイメージが世界中に拡散している。日本では、1920年（大正9年）の野上彌生子による初訳以降、多くの訳本が出版され、特に少女雑誌というメディアを中心に、日本独特の「かわいい」ハイジ像が可視化された。1974年（昭和49年）に放送されたテレビアニメーション『アルプスの少女ハイジ』（ズイヨー映像）は、演出の高畑勲、場面設定の宮崎駿、キャラクターデザイン・作画監督の小田部羊一らにより制作され、メインスタッフが物語の舞台であるスイスへ赴き、日本のテレビアニメーション史上初の海外ロケハンを行った作品である。

ハイジ展は、“ハイジ”という物語の視覚化の歴史を「文学」と「アニメーション」の双方から再構築したこと、展示品の多くを「実物」、「制作当初の物」で構成したことが特徴である。原作者シュピーリ直筆の手紙、原書や翻訳本に掲載された挿絵やイ

¹ 京都大学文学研究科

² スタジオジブリ／日本ハイジ児童文学研究会

³ 浜松市教育委員会／浜松市美術館

ラストの原画等を展示し、原作者シュペーリの生涯を激動の時代背景とともに紹介し、日本を含めた世界各国の『ハイジ』の翻訳や映画作品、絵本等を通して、海外と日本での受容を比較した。そして、テレビアニメーション『アルプスの少女ハイジ』の制作者による企画や原作の解釈、映像化のための工夫等を、当時の制作資料（原画、レイアウト、絵コンテ、セル画、背景画等）をもとに紹介し、アニメーション作りの仕組みを紹介した。

本論は、ハイジ展を通して、従来さまざまな形で視覚化されてきた“ハイジ”という物語の価値や魅力について、実際の展示物や展示構成に即して改めて整理し、総括するものである。また、ハイジ展来館者の反応（来館者アンケート、SNSの記述等）から成果と課題を検証し、“ハイジ”に関する今後の研究や普及活動の指針を見出した。

2 ハイジ原作の旅－スイスから世界へ－

(1) コンセプト（川島）

“ハイジ”の世界を「文学」と「アニメーション」双方から再構築するという構想の発端は、2019年7月から10月にかけてチューリヒのスイス国立博物館で実施された「日本のハイジ展」⁴にまで遡る。この展覧会は、従来ヨーロッパでは（シュペーリの原作を歪めたものとして⁵、あるいは過度の商業主義の産物として⁶）否定的に見られがちだった日本製アニメを再評価し、その制作に携わった人々の「本物」志向と緻密な仕事ぶりに光を当てた点で、歴史的な意義があるものだった。スイス国立博物館がこの企画

⁴ チューリヒ大学の日本美術史家ハンス・ビャーネ・トムセンの発案により、任意団体「日本ハイジ児童文学研究会」の桜井利和（故人）の“ハイジ”関連コレクションから展示品を供出する形で行われた。日本側の企画立案および実行は、同研究会のちばかおりと川島隆が中心となって進めた。

⁵ Hurrelmann, Bettina: Heidi, Mignons erlöste Schwester. In: Dies. (Hrsg.): Klassiker der Kinder- und Jugendliteratur. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch, 1995, S. 191-215, hier S. 201.

⁶ Rogge, Jan-Uwe; Jensen, Klaus: Anmerkungen zum kommerziellen Kindermedienverbund. Der Hunger nach „Heidi“. In: Dies. (Hrsg.): Der Medienmarkt für Kinder in der Bundesrepublik. Tübingen: Tübinger Vereinigung für Volkskunde, 1980, S. 13-48.

に踏み切った背景には、今日スイスの「国民神話」⁷とさえ呼ばれる“ハイジ”の図像学的イメージが、世界的に見て、そのかなりの部分までを日本製アニメに由来するものに占められているという事情がある。ただし、この展覧会の準備の過程では、スイス側と日本側の展示意図の違いが浮き彫りになった。特に、スイス側が提示した構想中の「日本」像が平板かつステレオタイプ的である点に、日本側の不満が集中した。この齟齬は深刻であり、ときにスイス側と日本側の協力関係を危うくするものであった。

以上の反省に立ち、浜松市美術館のハイジ展の企画⁸においては、ステレオタイプのなものの存在意義を全否定はしないよう注意すると同時に、“ハイジ”像の多様性を最大限に表現することが意図されていた。すなわち、1974年のアニメ『アルプスの少女ハイジ』が、いわば不思議の国ニッポンから突然変異的に生まれてきたものではなく、原作の出版以来140年あまりの“ハイジ”視覚化の歴史において、どのような力が働いた結果としてどのような潮流が生まれ、それが最終的にどのようにアニメ版へ流れ込んでいったのかを通史的に可視化することが、当初から目標として設定されていたのである。そのためには、原作や翻訳本に添えられた挿絵の歴史をたどることはもとより、1920年の初訳以降に日本国内で新たに生まれた数多くの“ハイジ”の姿を追っていく必要があった。

世界における“ハイジ”視覚化の歴史を再構築するにあたっては、ヨハンナ・シュペーリおよび“ハイジ”関連資料を網羅的に収集することを目的に活動している「ハイジ資料館 Heidiseum」⁹の協力が得られたことで、企画が大きく進展した。特に、世界初の“ハイジ”視覚化の例とされるフリードリヒ・ヴィルヘルム・プファイファーの挿絵原画と、イラスト化の過程でヨハンナ・シュペーリが出版社および挿絵画家に宛てた直筆の手紙（図1）¹⁰を提供されたことが重要であった。これらの手紙からは、作品内の

⁷ Wissmer, Jean-Michel: Heidi. Enquête sur un mythe suisse qui a conquis le monde. Genève: Métropolis, 2012, p. 13. 邦訳：ジャン＝ミシェル・ヴィスマール（川島隆訳）『ハイジ神話 世界を征服した「アルプスの少女」』晃洋書房、2015年、5頁。

⁸ 上述のトムセン教授を介して2019年の「日本のハイジ展」について知った浜松市美術館側から日本ハイジ児童文学研究会へと協力の打診があり、企画が始動した。

⁹ ドイツ文学者ペーター・O・ビュトナーによって2018年にチューリヒで設立。

¹⁰ 手紙の文字起こし版は以下で読むことができる。Peter O. Büttner: Von der Genauigkeit, mit der Kinder Bilder betrachten. Johanna Spyris Kommentare zu F.W. Pfeiffers Illustrationen ihrer

記述を踏まえてハイジの姿を描くこと、スイスの山の暮らしをリアリティをもって描くことを挿絵画家に求め、細部にこだわって妥協を許さないシュペーリの姿勢が浮かび上がる。これを受けたプファイファーの挿絵は、きわめて原作の作中描写に忠実なものとなっていたのである（図2）。

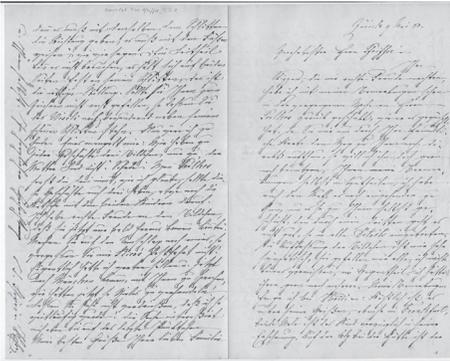


図1 シュペーリの手紙 (Heidiseum 蔵)



図2 プファイファーの原画と印刷版 (Heidiseum 蔵)

しかし、出発点においてシュペーリのテキストへの忠実さを基調としていた“ハイジ”の図像学的なイメージは、その後、そこからの逸脱を顕著に示すようになっていく。たとえば、1925年にアメリカで出版された英訳本に添えられたルイス・リードによる挿絵（図3）は、ハイジを金髪に、クララを黒髪に描いている点が注目される。これは原作中の描写よりも「スイス人少女＝金髪」というステレオタイプを重視した結果であり、1937年のシャーリー・テンブル主演のアメリカ映画『ハイジ』が広めた金髪の“ハイジ”像を先取りするものである。また、1930年代から40年代にかけて、シュペーリ作品のフランス語訳者シャルル・トリッテンが手がけたフランス語の『ハイジ』続編シリーズ（図4）では、主人公ハイジは原作中の描写からはかけ離れた「女らしい」人物に改変され、おさげ髪の少女としてイラスト化された。

Werke. In: Kinder- und Jugendliteraturforschung 2006/2007, S. 117-125.



図3 ルイス・リード画の金髪のハイジ



図4 シャルル・トリッテンによる続編シリーズ



図5 野上彌生子訳(1920)の口絵
(桜井利和蔵)



図6 底本(1909)の口絵、
リジー・ローソン画

日本における“ハイジ”視覚化の始まりは、基本的にはこの流れに属している。1920年の野上訳(図5)には、底本とした1909年の英訳本(図6)の挿絵が用いられていたが、1924年(大正13年)から翌年にかけて実業之日本社の雑誌『少女の友』で連載された『アルプスの少女』(深水正策訳、挿絵画家不明)から、日本独自の視覚化が始まる。その後、大正時代から昭和初期にかけての日本では、“ハイジ”は引き続き主として少女雑誌で少女向けコンテンツとして紹介され、松本かつち、落谷虹児といった時代を代表する挿絵画家たちが挿絵を描くことになる。そこでは、もっぱらモダニズムの手法で西洋的なもの、おしゃれなものの具現化として“ハイジ”が表象された。少女雑誌の通信欄における読者投稿からは、「かわいい」存在としての“ハイジ”に読者が熱狂していたことが分かる。意志の強さと精神力に特徴づけられる原作のハイジに対し、日本で受容されたのは、もっぱら「かわいい」キャラクターとしてのハイジだっ

たのである。その点は、戦後の日本で『ハイジ』翻訳・翻案の発表媒体の中心が少女雑誌から「世界名作」全集へと移行してからも一貫しており、それは1974年のアニメ版『アルプスの少女ハイジ』へとつながり、頂点に達する。

このハイジ像の変容の過程を追うことは、日本社会のジェンダーおよび家族体制の特徴をあぶり出すことをも意味しているため、重要である。ただし、日本的な「かわいい」「ハイジ」像の出発点をなす深水正策訳においては、テキストのレベルでは主人公の少女の「強い」側面が強調されてもいる（その点は、当時の少女雑誌、とりわけリベラルな誌風の『少女の友』の傾向にも合致していた）。たとえば原作の第3章に相当する山の牧場の場面で、ヤギ飼いの少年ペーターがいたずらな仔ヤギを鞭で打とうとするのをハイジが止める箇所では、彼女は「黒い瞳を鋭く光らして、斯んなに強い命令をする」¹¹ことでペーターをたじろがせる。原作の該当箇所には「強い」という言葉はないため、訳者が原作の少女ハイジの強さを意識し、あえてこの言葉を追加したことが分かる。



図7 深水正策訳とそのイラスト（挿絵画家不明）

一方、同じ箇所をアニメ化した高畑勲は、ペーターに向かって「強い命令」を発するどころか、泣きそうになりながら哀願するハイジの姿を描いている（第3話「牧場で」）。同じエピソード中で、ペーターは無知なハイジに対して繰り返し「馬鹿だなあ」と言う。つまり、ここではペーターが強くて賢くなる一方、ハイジは弱く愚かな存在に

¹¹ 『少女の友』第17巻12号、161頁。

改変されているわけである。しかし、アニメ版のキャラクターデザインを手がけた小田部羊一は、演出の高畑勲から、いかにも「かわいい」少女像ではなく、「おじいさんをまっすぐ見つめる」ハイジの姿を描いてほしいと要望を受け、そこからアニメ版のデザインが生まれたと証言している。原作の少女の「強い」側面は、いわば通奏低音のように日本の「かわいい」キャラクターの系譜を支えていたと考えることができる。また、原作者シュペーリが自作のイラスト化に際して見せた細部へのこだわりは、アニメ版の制作者たちがロケハン旅行を敢行してリアリティと「本物」らしさにこだわった姿勢に通じるものがある。こうした連続性を取り出すことも、今回のハイジ展の重要な課題であった。

(2) 展示の実際（島口）

展示の導入は“ハイジ”という物語の概要と原作者のヨハンナ・シュペーリの紹介である。物語については、原作『ハイジの修業時代と遍歴時代』、『ハイジは習ったことを役立てる』に準えたコンパクトな文章、物語の舞台となった場所や関連施設を記載したグラウビュンデン州の地図で紹介し、“ハイジ”という物語に初めて出会った来館者でもその概要が理解できるように配慮した。原作者については、スイスより輸入したヨハンナ・シュペーリ直筆の著作リストや挿絵画家への手紙（いずれもハイジ資料館蔵）、各児童書の原書を展示することで、原作者の業績はもちろん、仕事に取り組み姿勢等について、来館者が実物資料を通して直接的に感じ取れるように留意した。

次に、世界各国で出版された“ハイジ”の物語に掲載するために描かれた挿絵（いずれもハイジ資料館蔵）を展示した。フリードリヒ・ヴィルヘルム・プファイファーが描いた山の牧場で山羊に囲まれるハイジは、世界で初めてハイジが図像化されたもので、その原画と挿絵掲載の原書を並べて展示した。また、フランクフルトからアルムへ帰り、おじいさんと再会するハイジの原画は、ハイジの服装に原作との相違があることをシュペーリ自身が指摘したというエピソードを交えて紹介することで、原作者の性格や仕事に対する姿勢を想起できるように構成した。その他、ハインリヒ・ブーゼミル、ルイス・リード、ローラ・アングラードといった世界各国の挿絵画家の手によるハイジの原画を比較可能な形で展示することで、髪型、髪色、表情、服装等、様々

なバリエーションのハイジのイメージが世界中に拡散していることへの理解を、造形的な視点から促すようにした（図8）。

続いて、“ハイジ”という物語の世界的な広がりの一部である日本での広がりについても取り上げた。序盤、1920年に日本語初の訳本として登場した野上彌生子版の『ハイヂ』の原書を展示した。この翻訳はマリアン・エドワーズによる英訳本を日本語に重訳したもので、掲載されたりジー・ローソンの挿絵もそのまま使用されている点が興味深い。これらを併せて展示することで、世界から日本へのハイジの物語や図像の伝播の様相の一端を感じ取れるようにした。そして、日本人の挿絵画家によって描かれたハイジを、原画の展示を通して紹介した。落谷虹児による「世界名作全集第23巻『アルプスの少女』」（講談社）掲載の挿絵は、カラーの口絵、ペン画の挿絵の原画全カットが現存しており、それらを物語のストーリーを追うように展示した。松本かつぢによる『小学二年生』（小学館）掲載の挿絵原画も、一部欠ける箇所があるものの大部分が残り、落谷の原画同様にストーリーに準えて展示することができた。落谷の挿絵がモノクロのペン画であるのに対し、松本の挿絵がカラーの水彩画である点は、作風を含め対照的であり、両者の原画は展示構成の両輪を成した（図9）。高橋真琴による挿絵は、美少女画の先駆者の異名さながらに輝くハイジやペーターの瞳が目を引き。加えて、本作ではハイジよりもペーターに大きく焦点が当たっていることから、“ハイジ”という物語の捉え方が、戦前の少女同士の友愛の理想化から異性愛的な構図に変遷していったことを明らかにすることにつながった。



図8 世界各国で図像化されたハイジの展示



図9 日本のハイジ翻訳本や挿絵原画の展示

3 アニメーションになったハイジー日本から世界へー

(1) コンセプト (ちば)

1974年のテレビアニメ『アルプスの少女ハイジ』が突然変異で生まれてきたものではなく、“ハイジ”視覚化の歴史の流れの中にあることは先に2にて指し示したところである。

アニメーション部門の展示では“ハイジ”視覚化の一表象ではあるが、いまや世界で最も代表的な視覚化といってもよい小田部羊一氏デザインのハイジが、いかなる過程を経て誕生したのか、本人の証言、キャラクタースケッチ等の当時の資料から明らかにしたいと考えた(図10)。

一方、アニメーションとして『アルプスの少女ハイジ』を捉えた場合、これをそれまでのテレビアニメーションの流れの中の一作品と捉えるのは不足であろう。『アルプスの少女ハイジ』はアニメの進化の歴史の針を一段押し進め、後のスタジオジブリにつながる、新たな潮流のいわば起点となった作品である。

1970年代初頭、日本から田園風景が次第に姿を消し、各地で公害問題が表面化していた。経済優先のがむしゃらに働くだけの暮らしの中で、やがて人々は本当の豊かさとは何かを求めるようになっていく。その声に応えるように現れたのが、自然の美しさと人間の心を温かく描いたアニメーション『アルプスの少女ハイジ』であった。

『アルプスの少女ハイジ』の制作を担ったのは、高畑勲、小田部羊一、宮崎駿といった、東映動画の長編アニメーションで力をつけた実力者たちで、彼らが持てる技術を全力で注ぎ込んだ『アルプスの少女ハイジ』は、テレビアニメーションとしては破格のクオリティを持っており、日本のアニメーションの金字塔となった作品である。

『ハイジ』という作品は制作時にはすでに児童文学の古典と位置づけられていた。『ハイジ』は明治後期からの西洋児童文学の流入と翻訳の中で精査され、昭和以降は児童文学全集に多く採用されるなど、アニメ制作以前に広く物語が日本人の中に浸透していた。アニメーション化はそうした日本における『ハイジ』受容の延長線上にあるといえよう。アニメーション化されるにあたり、企画者、演出家なども自身に『ハイジ』の読書体験がある。

日本で制作されたアニメ作品が数多あるなかで、50年近く経ってなおこれほど人に愛されている『ハイジ』は本当に幸せな作品だと言えよう。演出も、絵も、音楽も、52話連続の小映画といえる『ハイジ』は、日の目を見ることもなく埋もれていくアニメがほとんどのこの世界で、不変の魅力を持って今も輝いているようだ。

ハイジ展の展示を通して、『アルプスの少女ハイジ』が一つのアニメ制作物にとどまらず後続に多大な影響を与えた作品であること、『ハイジ』の成功が、日本のアニメーションに及ぼした影響も検証したい。また、現在とはかなり異なるアニメーションの制作工程を順路に沿って展示していく中で、多くの人によって分業され、かつ再構成されて一つの作品になる過程を制作の側面から追うことで、演出者の意図がどのように伝えられたのかをみてみたい。テレビアニメーションは1話につき何千枚もの絵を使って、動きを表現する。毎週放映されるため、納入期限を守るため大勢の人とチームを組んで作業することになるが、同時に絵柄の統一が重要なポイントになる。また演出家が自分の意図した作品にするためにどこまで仕事をするかも大切である。

演出の意図とはつまり『ハイジ』という物語をどう解釈したかに他ならず、日本における『ハイジ』の受容に他ならない。特にアニメにおいて作品解釈が大きく問われるのは、当然ながら絵が動き、音楽や台詞などで五感に働きかける媒体であるためだ。例えば文字でただ「歩いてた」と描かれていても、映像においては、どのような場所でキャラクターがどのような表情でどんな風に歩いてたか明確にする必要がある。その時のBGM、色調も組み合わせることで、何通りもの映像表現が選択できる。そのため映像化において、スタッフが何を参考にし、何を見て何を描いたのか、または描かなかったのかを検証することが重要になる。そこで本企画においては現地の写真を提示し、制作に際してスタッフがロケーションハンティング（ロケハン）を行ったことにスポットを当て、ロケハンがどのように作品世界を構築する上で参考になったかも注目したいと考えた。

今回の展示においては、当時の担当プロデューサーほか、キャラクターデザイナーなどのメインスタッフに直接話を伺い（図10）、制作時のリアルな状況を再現することに努めた。現在アニメーションの制作はデジタルへの移行が進み、アナログ時代の技術は急速に失われているが、彼らの技術と経験をこのような展示会という形を借り

て後世に残すことは大きな意義があるであろう。資料の散逸、保全、そしてその過程において聞いた話の内容をアーカイブ化することで、展示に足を運ぶことができなかった多くの人をはじめ、後世にも研究の素材としてある一定の保護がされたと考えられる。



図 10 展覧会に向けたインタビュー
(中島・小田部)

根底にあるのは本展のテーマでもある「本気」である。決して子どもだましではなく、大人が子どもたちのために本気で作った作品、それが『アルプスの少女ハイジ』である。『ハイジ』のプロデューサーである高橋茂人の中に『ハイジ』アニメ化の思いが芽生え、やがて結実するまでの過程をアニメーション製作の工程を細部まで丹念に提示することで、実感として伝える、それがアニメーション部門のコンセプトであった。

(2) 展示の実際（島口）

『アルプスの少女ハイジ』の企画構想段階の資料として、マーチャンダイジング用 PR 冊子を展示した。日本語版と英語版を併せて展示することで、『アルプスの少女ハイジ』が構想当初から海外マーケティングを視野に入れ制作されたものであることを示した。また、『ど根性ガエル』の絵コンテの裏に描かれた構成メモや『『アルプスの少女ハイジ』PR 計画』等、当時の関係者の手によるものと思われる資料を展示し、『アルプスの少女ハイジ』が入念な準備・計画のもとで企画構想されていたことを明示した。

『アルプスの少女ハイジ』は日本にアニメーション制作では初となる海外でのロケハンを実施したことで知られる。制作スタッフの高畑勲、小田部羊一、宮崎駿のロケハン時の様子を数多くの写真パネルで紹介した。また、ロケハン時に小田部が持参した

スケッチブック、ロケハンの工程が記録された計画メモ（中島順三筆）等の実物を展示することで、ロケハンの概要や制作スタッフの『アルプスの少女ハイジ』制作にかける思いに寄り添うことができる展示を心がけた（図 11）。

ロケハン後に小田部によって描かれたキャラクターのアイデアスケッチの原画の展示では、前述のマーチャンダイジング用 PR 冊子やロケハン出発前のスケッチに描かれる三つ編みのハイジと、完成版の短髪でくせっ毛のハイジ像の比較に重点を置き、その変化の鍵となるロケハンでの小田部の体験談を交えて紹介した。加えて、おじいさんのアイデアスケッチに取り入れられたパイプは、中島がロケハン時に資料として購入した土産がもとになっていることを、原画とパイプを近い位置で展示することで、分かりやすく伝えることができるように配慮した（図 12）。



図 11 ロケハン関係資料の展示



図 12 小田部羊一のキャラクタースケッチの展示

アニメーションの制作工程に関する展示では、その流れを図式化したパネルを作成したり、当時の作画機や彩色機を作成したりすることで、来館者が制作工程を想起しやすいように工夫した。作画機と彩色機の上には、当時のスタッフの仕事ぶりを捉えやすいように、小田部羊一、小山明子の助言を受け、ちばかおりが直接様々な小道具を配置した（図 13）。その他、制作工程の詳細については、可能な限り実物、当時物の資料の展示を通して紹介することを重視した。キャラクター設定では小田部が完成版のキャラクターデザインに辿り着くまでの変遷を辿るようにスケッチブックの素描を複数展示し、場面構成では実際にはアニメに登場しない場所の様子まで事細かに定められた設定画を展示し、宮崎駿の仕事ぶりを小田部への取材で明らかになったエピソード

ソードとともに取り上げた。脚本や絵コンテは、全52話の中から、クララが立つシーンを含む有名な場面を厳選したり、高畑勲の演出家としての仕事ぶりに焦点を当てたりすることで、“ハイジ”の物語や『アルプスの少女ハイジ』に慣れ親しんだ経験の少ない来館者が楽しめる展示構成を心がけた。また、レイアウトやセル画ではハイジやクララ等の主要な登場人物が大きく描かれたものを選んだり、動画はオープニングでブランコにのるハイジや山羊のユキとスキップする有名な場面を選んだり、幅広い来館者の鑑賞に配慮した。一方で、各制作工程で用いる機材（トレスマシン、シンクロナイザー等）や『アルプスの少女ハイジ』の主題歌や挿入歌に関する当時物の資料（歌詞原稿、楽譜等）の実物展示を通して、アニメーションに関心の高い来館者の満足度を高める視点も大切にした（図14）。



図13 制作当時を再現した作画機の展示



図14 楽譜や歌詞原稿等の音楽に関する展示

5 成果と課題

(1) ハイジ展来館者の反応（島口）

①来館者アンケート

来館者の居住地について、約半数を浜松市在住者が占める一方、約20%は静岡県外在住者であった。テレビによる展覧会広報が静岡県内に限られたことをふまえれば、この数字は“ハイジ”というコンテンツの全国的な知名度の高さ、全国巡回しない「浜松市美術館完全オリジナル企画」を謳ったことによる成果といえる。

年齢別では50代が27%を占め、『アルプスの少女ハイジ』になじみ深い世代の来館

者が目立つが、10代以下が31%とそれを上回る結果となった。夏休み期間の子ども達の来館が多かったことに加え、親子連れや家族連れでの来館も多く、“ハイジ”というコンテンツが現在でも世代を超えて親しまれている様相が窺える。なお、性別では、7割以上が女性の来館者であったことは、日本の「かわいい『ハイジ』」の図像の継承や広がりや影響を与えているものと推察される。

展覧会の満足度（①満足・②やや満足・③普通・④やや不満・⑤不満）については、肯定的な回答（①75.4%・②17.7%）をした来館者が9割以上を占めた。①と回答した来館者が75%を超えたことは、館単独のオリジナル企画の展覧会として特筆される。（参考：R3「みほとけ展」69.3%、R3「遠州の民藝展」58.1%、R3「静岡県美展」43.2%、R4「遠藤美香展」67.5%）

記述式の自由回答欄には、「独自企画でここまでするのはすごい」、「全国巡回してもよいくらい素晴らしかった」等、単館のオリジナル企画として展覧会を開催したことを評価する声が多くあがった。また、「ハイジの熱狂的ファンがスタッフにいるのか」、「キャッチコピー通り本気の企画展」、「今回は熱意の感じられる展示で、パネルやテキストも分かりやすく、見ごたえがあった」等、展示物や展示構成、解説等の充実度について評価する声もあった。さらに、「2Fの動画、小説版ハイジがすごくよかった」、「2部構成の内容は分かり易く、ハイジが日本の文学史でどのように位置づけられているか興味深かった。」等、「文学」と「アニメーション」の両面からのアプローチを評価する声があった。

「今後見たい展覧会」に対する回答（自由記述）では、「山ねずみロッキーチャック」、「赤毛のアン」、「母をたずねて三千里」、「あらいぐまラスカル」をあげた来館者がいた他、スタジオジブリ関連の展示を望む声が多数寄せられた。これは、ハイジ展の来館者の多くがハイジをはじめとしたアニメーションに高い関心をもっていることを示唆する。加えて、「とてもよかった。ファンなのでぜひまた展示してほしい。」、「ハイジのファンで来館した。来てよかった。」等の声があがったこともそれを裏付けるものといえる。“ハイジ”を含むアニメーションというコンテンツに高い関心を示す来館者が多い今回のハイジ展において、満足度の高い数値や数多くの肯定的な意見を得られたことは、一定の評価に値するものといえる。

一方で、ギャラリートークの回数増、トークショーや講演会のオンライン配信、音声ガイドの用意等、展示内容の理解を促す多様なコンテンツの充実を求める声が多数よせられている。これらについては、今後、予算面、ソフトとハードの両面から対応策を検討していく必要がある。しかし、裏を返せば、ハイジ展がそれだけ「展示内容をより詳しく知りたい」という来館者の学習欲求を掻き立てた展覧会であったともいえる。こうした来館者の前向きな要望に順次応えられるよう検討を重ねていきたい。

② SNS

展示全体を通して、「浜松市美術館かなり頑張っていて、外国からも日本のアニメーション会社からも本物を取り寄せていて、原作小説の挿し絵の原画は世界初公開らしく貴重なので是非見に来て下さい。」(ひーやん @hiyan23 午後 3:18・2022年8月13日)、「富野コンテを観たくてハイジ展に来ただけだけどこの展示すごい。文学としてのハイジとその作者について、世界への拡がりから日本のアニメまで色々な角度で作品を分析、解説してくれる。知識欲を刺激され勉強になった。」(Ykod @kmdgr 午後 2:01・2022年9月10日)、「浜松市美術館「ハイジ展」アニメ版權絵並べただけのぬるい展示など許さない！という気迫に満ちた、なかなかにかどうかしてる企画展。原著・和訳の各挿絵原画からアニメはロケハン資料から幻のパイロット版設定画まで、そんなものまで持ってくる？のオンパレードで変な笑いが止まらない…」(ASD@ asdn4231 午後 9:49・2022年7月24日)等、スイス直輸入の世界初公開の原画を含む実物資料を中心に展示を構成したことが好評を博した。

第1章の展示については、『アルプスの少女ハイジ』のみよく知っているという前提のもとに、「ハイジ展、半分くらいは日本のアニメーションのハイジだったが、それ以前以後、世界各地の作品が紹介されていてとても興味深く見る事ができた。古い挿絵版のハイジとかの画集とか、メディアも古い映画作品とかがあったら欲しかったな。」(votoms909 @votoms909 午前 10:47・2022年8月18日)、「ハイジの作者ヨハンナ・シュペーリの直筆の手紙とか、各国のハイジの訳本とか展示物の集め具合に気合いが入っている。日本のハイジも様々なバージョンがあって興味深い。後半がアニメの展示だけどトレスマシンとかシンクロナイザーの実機なんかもあって驚く。」(Ykod @kmdgr 午

後 2:15・2022年9月10日)等、世界各国や日本で図像化された様々なハイジを見ることのできた点を評価する声が多かった。また、「昼間ツイートしたように今日は浜松市美術館のハイジ展に行きました。スイスのハイジ資料館の所蔵品や個人蔵の貴重な実物資料が数多く展示され、原作とテレビアニメ版に留まらず世界や日本での『ハイジ』の受容の過程まで網羅した充実した展示内容でした。(ORII (泡沫P) @orii2009 午後10:28・2022年8月14日)、「この #ハイジ展 はガチだった!!日本のアニメ版だけでなく原典からの変遷をガッツリ捉えた本気の展示でした……。ハイジ……こんなにメガコンテツだったんですね……。ところで、戦前のハイジは少女小説としてエスの文脈が主流だったんだって!ハイジとクララの百合……かあ……へえ……ふーん…」(なりはら @VRC+ ●冬はマフラスク水 @Benishoga_2 午後1:47・2022年7月23日)等、「ハイジ」という物語や図像化されたハイジの原画そのものに留まらず、文化の受容や変遷という側面に関心を示す声もあった。特に、「原作をフランス語に訳した人が勝手にたくさん続編を書いたとか、日本でも戦前から知られていたがハイジ×クララを“S”的なものと見て少女読者が憧れていてハイジ×ペーターの異性カップルに焦点が当てられるのは戦後だとか、驚きの事実が面白かったです。」(ORII (泡沫P) @orii2009 午後10:33・2022年8月14日)、というように、戦前から戦後への変遷に驚きと興味を示す感想が目立った。

第2章の展示については、「行って来ました🐼🐼🐼 #ハイジ展 世界各国の“ハイジ”の作品や小さい頃毎週観ていたあのハイジのアニメ制作者による当時の制作原画や絵コンテやセル画等紹介されていたり…とても見応えありました😊ハイジの足音と声や風までも聞こえて来るようでした 久しぶりに当時のアニメを観たくなりました😊」(KAR あ(かるちゃんと呼んでください) @ZkBrjhCVqYhVZ4S 午後5:56・2022年8月4日)、「念願の!大変貴重な展示品の数々を観る事が出来て本当に来て良かった。感無量です。子供の頃再放送でずっと観てたあの子達にやっと会えた様で、嬉しかったです。地元・浜松市美術館で開催して下さい、心より感謝します。あの子の足音、きこえました。」(カワセミ△ありがとう歌マクロス! @lappy258 午後4:18・2022年9月6日)等、『アルプスの少女ハイジ』放映当時を懐かしむ声が多く上がった。また、「4/4から猛然と描いたこと。全52話の全てのレイアウトを描き更に自分で彩色までやった

カットまでであるという。主要な3人の超人的な仕事ぶりで名作が完成したことが数々の資料で体感することができた。いわゆる「名作アニメ」が構想、受容されるに至った社会背景を資料で迎える良展覧会。」(rodydaddy@rodydaddy 午後 10:04・2022年7月21日)、「確かに変質は創造の源でしょうね。小田部さんの描いた三編みのハイジのキャラデザをロケハン先のシュペーリ文書館長に「5歳の娘が三編みを編めるか？オンジが編むか？」と言われて今のデザインに変更したというのもいいエピソードです😊いい展覧会は論文だと常々思ってますがまさにそれでした😊」(rodydaddy@rodydaddy 午後 10:40・2022年7月21日)等、当時物の資料を通して高畑勲、小田部羊一、宮崎駿の仕事ぶりに感銘を受ける声も多数寄せられた。

加えて、『『ハイジ』という作品を通じてヨーロッパの文学状況がいかにして日本に受容されたか、そしてそれが変質しアニメとして結実していったかを資料で概観できます😊アニメにオンブに抱っこ企画ではなく原作とアニメの歴史的繋がりが体感できます。本当に多くの方に観ていただきたい展覧会ですね😊」(rodydaddy @rodydaddy 午後 10:27・2022年7月21日)、「観に行ってもよかったとしみじみと思う展覧会でした。子どもの頃に見たアニメ「ハイジ」の印象と、原作の間にある、色々な思いがスツとうまるような、素晴らしい展示でした。最初は「懐かしい」くらいの気持ちだったのですが、自然と涙が出ます。9月11日までです。」(植朗子 @AkikoUEI 午後 7:22・2022年9月2日)等、第1章と第2章を関連させたり比較したりする声も多く、「文学」と「アニメーション」の両輪で“ハイジ”という物語の価値を再構築したことが肯定的に受け止める声も散見された。

(2) 検証① (ハイジ原作の旅-スイスから世界へ-) (川島)

来館者アンケートの回答者の7割以上が女性であったことは、“ハイジ”の物語が日本において、その受容の出発点から少女向けコンテンツと定義されたことの延長線上で理解される。また、とりわけ男女差別が激しい国としての日本にあって“ハイジ”が特にアニメ版の放送以降、女性にとっての一種の逃避場所を提供したという先行研究の観測¹²を一定の範囲で裏づけるものだとも考えられる。ただし、来場者が必ずしも特

¹² Domenig, Aya: „Cute Heidi“. Zur Rezeption von Heidi in Japan. In: Halter, Ernst (Hrsg.): Heidi,

定の性別、特定の年齢層には集中せず、性別や年齢の多様性を示した点は、日本における“ハイジ”受容のあり方が20世紀の終わり以降に変化しつつある事情を示唆するように思われるため、特筆に値する。今後の研究の課題としたい。

来場者の反応からは、やはり1974年のアニメ版こそが“ハイジ”の世界への入り口になっていた人が多く、今回の展示が強烈になつかしさを喚起するものであったことが確認できた。その点は事前の予想通りであるが、文学方面を扱った1階部分の展示への好意的な反応の多さは予想以上であった。

企画段階においては、慣れ親しんだアニメ版とは違う絵の“ハイジ”を並べることは、来場者の違和感や忌避観を引き起こすことにつながり、「こんなのハイジじゃない」といった反応もありうるのではないかと懸念も存在していた。しかし実際には、多くの来場者にとって、アニメ版以外の“ハイジ”の展示に大きなスペースが割かれているのはけっしてネガティブな事態ではなく、初めて目にする新たな“ハイジ”像に触れることができた純粋な驚きや喜びが支配的であった。また、ハイジとクララの少女同士の友愛に焦点を合わせた戦前の受容から、ハイジとベーターで異性愛的な構図を表現する戦後の受容への移行といった歴史のダイナミズムにも、来場者の強い関心が向けられた。“ハイジ”をめぐる現象の世界的な広がりを視野に入れつつ、国・地域や時代によって大きな差異を示す“ハイジ”像の多様性を浮き彫りにするという企画当初の意図は十全に達成されたと言える。

その一方、SNS上でも要望する声があった、今回あまり詳細に取り上げることができなかった（実は非常に数多く存在している）実写映画版や、典型的に「かわいい」キャラクターとして以外の“ハイジ”像の存在なども含め、より広い視野で“ハイジ”現象を捉えていくのが今後の課題である。

(3) 検証②（アニメーションになったハイジ－日本から世界へ－）（ちば）

アニメーション部門の展示では、小田部羊一氏のハイジのキャラクターデザインの誕生の経過を追うとともに、テレビアニメシリーズ初となった海外へのロケハン、『ハイジ』で初めて導入されたレイアウトシステムを中心に制作工程を丹念に追うことで、

Karrieren einer Figur. Zürich: Offizin, 2001, S. 149-165.

アニメーション制作への理解を深めるとともに、制作者の仕事ぶりを伝え、いかにしてこのアニメが時代と空間を越える存在となったかを明らかにしようと試みたが、来場者の反応や SNS の投稿からは、概ね、その目的を達成できたのではないかと考えられる。また、制作当時、その制作資料は文化財と見なされることはなく、ごく一部の愛好家の手に渡ったか、熱心な制作者自身が資料として保管していたものが奇跡的に残されていたもので、今から 40 年以上前に制作された『ハイジ』では、すでに資料は散逸し、その所在自体を知ることが困難であったが、今回の展示準備を通じ、その所在に関する情報の集約が、一定程度進んだことは大きな成果といえよう。

一方、今回の展示ではハイジの「日本から世界への広がり」を示す上で、日本語版とドイツ語版のアニメの比較映像を上映や、「音楽の街・浜松」での展覧会に相応しい音楽面での展示の一層の充実も目指したが、いずれも著作権の問題で実現できなかった。アニメーションは映像作品であり、音声や音楽はその一部だけでなく、来場者に作品世界を想起させる重要なトリガーともなる。これは本展に限ったことではないが、著作権保護の重要性を鑑みつつも、公共性の高い美術展での利用などについて、わかりやすく、利用しやすい制度設計が待たれる。

また、アニメーションのセル画は光と熱に非常に弱く、長期間の展示になる場合は作品保護の観点から、そのノウハウの確立と蓄積、共有が課題となっていくだろう。さらに、もう 1 点付け加えるならば、『ハイジ』は、コンテンツツーリズムの言わば先駆けとなった作品であるが、この点については図録においては山村高淑氏（北海道大学）の寄稿により触れることができたが、今回の展示ではスペースの限りもあり十分紹介できなかったことが惜まれる。

6 おわりに（島口）

ハイジ展は、令和 4 年夏のコロナ禍「第 7 波」に翻弄されながらも、会期終盤には 1 日 800 人近い来館者を数える日もあり、最終的に 16000 人以上の動員を達成し、大団円を迎えることができた。「浜松市美術館完全オリジナル企画」、「本気のハイジ展」と銘打った通り、実物を中心に日本各地、スイスから集めた 500 点を超えるこだわり

の展示品を通して、“ハイジ”という物語に「文学」、「アニメーション」の両側面から迫り、その視覚化の歴史を多くの来館者に普及することができたものと総括できるのではなかろうか（図15・16）。



図15 第1章を鑑賞する来館者



図16 第2章を鑑賞する来館者

ハイジ展に関する数多くの SNS 投稿を振り返る中で、練馬区立美術館にて 2022 年 6 月 26 日～8 月 14 日に開催された「生誕 100 年 朝倉撰展」に関するものに目が留まった。「生誕 100 年朝倉撰展。朝倉撰が手がけた絵本原画のコーナーには、実際に手に取って読める作品も。たしか葉山では展示のみだったと記憶。朝倉撰が挿絵を描いた『少女少女世界の名作 15 アルプスの少女』（世界文化社、1970）は、浜松市美の本気の #ハイジ展 には出ていなかった。やや陰のあるハイジ像。」（passerby@tokyopasserby 午前 7:18・2022 年 8 月 14 日）とあり、浜松市美術館のハイジ展では紹介・言及できなかった作家や作品について、有意義な指摘がなされている。これは、展示会の実施により作品や資料が多くの来館者の目に触れ、SNS を介した展覧会主催者（研究者）と来館者の双方向性により、調査研究の視野を広げ新たな視点を生むという、相乗効果をもたらした好事例と捉えられよう。

今後、ハイジ展を通して得られた成果を起点とし、“ハイジ”という物語の研究に関して明らかになった課題や新たな視点について、「文学」と「アニメーション」の視点、展覧会を含めた普及活動の視点等、筆者一人一人がそれぞれの立場からの研究を継続していく。

ハイジ展の開催はもちろん、それに伴う諸研究が実施できたのは、ハイジ展に貴重な資料を貸し出していただいた所蔵者の皆様をはじめ、展覧会準備や研究の過程にお

いてご指導・ご助言を頂いた多くの関係者のお力添えによるものに他ならない。文末ではあるが、ここに関わる全ての皆様に感謝の意を表したい。